

# 孕ませ身射

美少女魔王軍と  
跡取りづくり

立ち読み版

小説 なるかく  
挿絵 鳥越タクミ





## 登場人物紹介

Characters



### ルルト

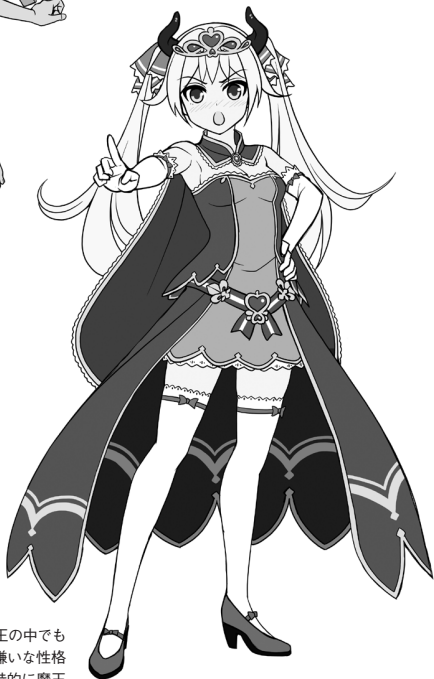
天真爛漫な獣耳少女。大地の怪物たちをまとめる実力者。好奇心旺盛でエッチなことにも興味深々。

### キュネス

ツンデレ魔王。歴代魔王の中でも随一の強さだが負けず嫌いな性格でちょっと不器用。一時的に魔王を父に返し子づくりに専念する。

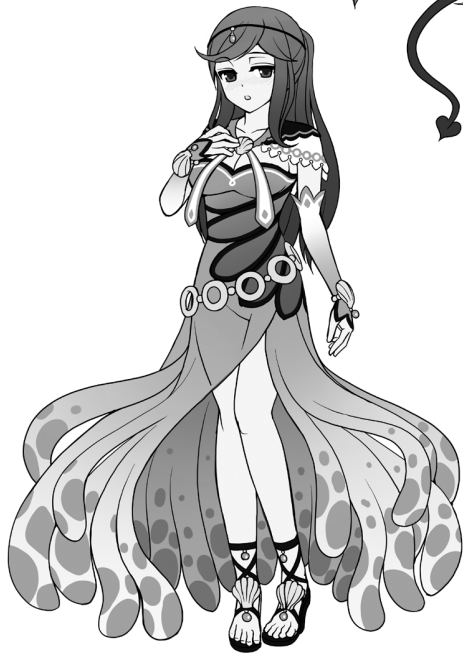
### トウジ

箱入り王子。大切にされ過ぎて剣も魔法もダメダメ。正義感は強く心優しい。



## キュネス

天空の支配者。妖艶な見た目とは違い結構天然で柔らかい性格。みんなの良き相談相手になるお姉さん。



## シャミーレ

海のモンスターを統べる指揮官。冷静な性格で頭がいいが少し嫉妬心が出てしまうことも。

序章

種付け勇射にされちゃった

007

第一章

初心な魔王は責められ好き

045

第二章

エッチな獣娘とお外で種付け

091

第三章

ヤキモチ焼き少女とイチャぬる風呂

128

第四章

天然お姉さんとフェロモンみるく

167

第五章

大好きな美少女魔王軍と跡取りづくり

205

終章

妊娠しても、まだまだ終わりにじゃない!?

250



「セリシアがエッチし易い様に、僕は言う通りにする。遠慮せずに何でも言つて」

自分に出来る最大限の提供をすると、処女魔王は考え込む。

「……………そ、そういう事なら……………取りあえず、予行練習でもしようかしらね」

咳払いを交えつつ、どこか嬉しそうな彼女は指先を動かし、何やら魔法を発動させた。

途端に少年の体から力が抜け、そのままふらふらと部屋中央のベッドに倒れ込んでしまふ。起き上がろうとしても上手くいかず、大の字に寝たまま首以外まったく動かない。

「うわ……………な、なんか体が動かないんだけど」

「アタシの魔法で動かさなくしてるだけよ……………えつと確か、この辺りに」

本当に彼女の魔法は強力だなあ、とトウジが思っている間に、セリシアは壁に掛けられた様々な淫具の中から一つを手を取った。

（？……………あれって、柱の一部かな……………何に使う物なんだろ）

魔王が手にしているモノの正体が分からなかった。手の平よりも少し大きめな円柱で、表面はピンク色。手が軽くめり込むぐらい素材は非常に柔らかそうで、よく見れば小さな穴が頂点に開いた、筒状の物だ。

「……………それじゃ、好きな様にさせてもらうわよ」

道具の説明もなく、それ以上喋らずにこちらに近付いてくる。今から何をされるのかあれこれ想像すると、なかなか恐い。

セリシアはベッドに乗り上がっていると、こちらの両足の間で正座する。そして身動き

が出来ない少年のズボンとパンツを、躊躇いながらもずり下ろす。

(うわッ! ……うう……や、やっぱり恥ずかしい)

上は着たままなのに、下半身だけを完璧に裸にされてしまう。言う通りにすると言ったが、やはり昨日剥けたばかりの股間を見られるだけでも、まだまだ恥ずかしい。

むず痒くなる羞恥心を少年が感じている中、着々と準備をする魔王。机に置かれていたピンを手に取ると、中の粘着質で糸を引く液体を、柔筒の中に流し込み始めた。

「あ、後はコレを……こうしてッ」

緊張しているのか、液入りの筒を軽く解して生唾を飲み込む。そして興奮前で力なく垂れる少年のペニスに、濡れる小穴を軽く擦り付けてきた。

——にゆるん。

「え? あひゃ!?」

柔らかくて妖しい感触が股間を襲う。まるでヌメった人肌に触れられているかの様だ。  
「あッ……昨日と同じで、ピクピクっしてしてるッ」

いやらしい感触に反応する男根を、恐る恐るといった様子で見るセリシア。細かい変化を敏感に観察しながら、柔筒を何度も押し付けてくる。

「うう……あ、セリシアそんなにッ……こ、擦られたら……!」

くすぐったいと思う反面、非常に心地よい感触が股周りを満たしてゆく。筋肉は強張って反応するのに、手足は全く動かさず逃げられない。妖筒を押し付けられて粘液を塗され

るペニスはどう膨らみ、あつと言う間に半立ち状態となった。

「そ、そろそろよさそうね……それじゃ……」

陰部をマッサージする為だけの道具だとばかり思っていた少年は、微快感で火照った顔を少女に向けてと、衝撃的な光景を目にした。淫筒の頂上に空いた小さな穴を、セリシアの指先がゆつくり、くぱあつ、と広げる。

(うわッ……中が……なんかすぐウネウネしてる!!)

濃液塗れでてる洞内の表面は、細かいデコボコを繰り返し、まるで円形の柔らかい洗濯板みたいだ。何かを連続して搾り取るらしい構造に、見るだけで変な興奮に襲われる。

(ま、まさかコレって……女の子の中に似せてるんじゃない……)

その考えに行き着いた瞬間、ふと、ある事を思い出す。この子づくり錠を作ったのはセリシア。恐らくこの部屋の道具も全て、彼女が作った物だろう。そして起伏筒が女性器を模した物だとすれば……。

「も、もしかしてこの筒の中って、セリシアの……お、おま○この中に似てるんじゃないッ!? ……ち、違ッ……入れるわよ!!」

予想が的中したらしく、一瞬固まった彼女は取り乱し、有無を言わさず広げた狭穴を勃起先端に押し当ててくる。

それだけで異様に心地よく、昨日剥けたばかりの分身は激しく打ち震えた。

「くうッ!? ま、待ってセリシア! も、もうちょっとだけ待っ——」



慣れない刺激を押さえ込む暇すら与えられず、筒中に勢いよくねじ入れられる。膨張した雄肉と、粘液で塗られた雌似肉の相性は恐ろしく最高で、一瞬で丸呑みにされた。

「ぐあッ!?　　ッ!　　ッ!　　ッ!　　ッ!!」

凄まじい刺激のあまり、少年の背中と顎が攀つた如く仰け反る。半立ち肉棒は大勃起して、狭い筒内に隙間なくみつちりと埋まる。

（うあああ　　何これええ!?　僕のが包まれて……こ、こんなに気持ちいいなんて!!）

硬棒が天を指す微動でさえ、もどかしい摩擦熱となって性欲を焼かれる。心臓の鼓動が一気に速さと強さを増し、煮える雄濁は捌け口を探して股間に集中してきた。

「ひゃッ……中でおちんちんが、すごく大きくなってる……わぁッ」

女筒を両手でしっかり握るセリシアは、指先に感じる勃起力にうっとり感嘆を漏らす。

「……こ、こんなに大きくして!　アタシの中と似てるからって、硬くし過ぎよ!」

彼女の中を再現した物だと分かるや否や、頭の隅から隅までが冴え渡る。

（やっぱり、セリシアのおま○この中と一緒なんだ!!）

いけない妄想が膨らんでしまう。恥じらう少女の両足を開き、繊細な陰唇を押し広げ、大事な粘膜の奥へ奥へとヌメリ進み、子供を愛しく育む奥の入り口へと。

「はああ……せ、セリシア抜いてッ……はあ……はあ」

着たままの上着が汗でびっしょりになる程に力み、興奮し過ぎて今も出そうだ。

「ぬ、抜くって確か……ゴシゴシする事でしょ?　し、仕方ないわね」

ところが意味を取り間違えた魔王は、両手で持つ膺筒を上下に振り始めてしまう。

「ち、違うっ……あああ!! や、やめ……ひゃああ!!」

握り締められた中は、極上の締め心地を誇る擬似膺。その中でろくに性行為を行った事がないペニスが、容赦なく抜かれまくる。

(うああ!! こ、擦れっ……すごっ……ああ! 出っ張りがジョリジョリされるっ!!)

非常に柔らかい波状のヒダが、粘液を竿に塗り付けてくる。それだけでも棒が溶けそうな程に気持ちいいのに、四方八方から締め付けてきて、亀頭のエラを容赦なく擦った。

「うわっ……な、なんだかまた硬くなつて……はあ……もう出そうなの? ……はあ」

こちらの両足の間で正座したまま、手と一緒になぜか腰を上下に揺らし続ける魔王。息を荒らげつつ扱くスピードを速めてゆくと、粘った濡れ音が淫具部屋の中に染み渡る。

——にゅちっ……くちっ……ずちっ、くちゅっずちゅくちゅ、くちゅくちゅくちゅッ!

「あうっセリシア速い! ……あ……ああや、ば……いッ! ……ッ! ……ッ! ……あッ……」

「こ、これぐらいで弱音を吐かないで……はあ……我慢しなさい」

手足を動かせず逃げる事も出来ない中、彼女の激しい筒責めは止まらない。射精に導いてるとしか思えない搾られ責めに、少年の昂りはどんどん熱量を増してゆく。

「……い、入れられるのって……どんな感じなのかしら」

膺を興奮に潤ませるセリシアは呟くと、肉筒を指でなぞり、何やら魔法を唱えた。そして射精間近でパンパンに膨らむ龟头を一際強く抜き、筒奥まで突き入れる。

「ひゃあ!? ……あッ……はうッ……こ、これ……ひやううッ!? 何これえッ?」

途端に目を見開いて、うねらせていた腰ごと小刻みに震える。精液を吐き出したと訴える勃起が振り返って中を摩擦すると、もどかしそうに桃尻をヒクつかせ始めた。

(も、もしかして僕……今セリシアと間接的に、エッチしてるの!!)

魔法を使つて淫筒の感覚を、セリシアの本物の股と同化させたのだと気付く。

「ん、ンッ! はああ……アソコがあ……ゾクゾクッてえ……ん、んはあ……」

もどかしい吐息と共に、彼女は偽陰を握っていた両手の片方だけを離し、なんと自分の股を弄り始めた。スカートの中に手を忍ばせ、本物のソコを恐る恐る探っている。

「あうッ!? こ、これ……あ、アッ! んッ!! し、下着ッ……染みてるう」

少しつらそうな声と顔で、見えない場所がどうなっているのかを囁く。いやらしい光景を想像したトウジは興奮し、思わず腰を突き出して肉棒を擬陰の奥にひねじ込んだ。

「ひゃあ!? と、トウジ……ッ……突いちやダメえッ……」

ビクン、ビクン、と背を反らせた彼女は甘い上ずり声を漏らす。目尻と眉毛は下がり、股を押さえて何かを必死に堪えようとして、共有筒を持った手をギユッと握り締める。

中にぎっしり埋まっている灼熱棒が、極上の圧力を受けて限界を迎えた。

(ああああ出る! 昨日出したのが……気持ちいいが出るッ!!)

——ドビュウッ!! ドビュッ! ドビュビュ!! ドビュウ!!

人生で二回目の射精を筒中で迎えると、絶頂の空に高く舞い上がる。

「んやああ!! な、何か入ってるうう!! 中で……吹き出てるう!!」

模腔の中に放たれた精液を、魔法の力で感じ取る少女。肩を竦すくませて二括りの髪の毛を揺らし、ドレス越しでも腹筋が震えるのが分かる程に悶えた。

そのせいでより強く筒を握り締められて、射精道を圧迫されたペニスは強烈な放出を繰り返し、擬似穴の子宮口を撃ちまくる。

「くひいん!! こ、こんな……ちよつとしかッ、共有してッ、ないのに……こんなにッ」

余程感じて脱力したのか、彼女が掛けた魔法が解けて少年の身体が自由になった。

「はああ……はああ……すごいッ、おもちゃの中が……精液でたぶたぶ……アタシの中に、本当に入っちゃってるみたい……」

絶頂ペニスが淫具から解放され、筒の小穴から雄液がゴポツ、と溢れ出てくる。まどろむ瞳で手のそれを見詰める少女は、間接的に感じた己の女股を優しく弄り続けていた。

「はあ……はあ……セリシア! も、もうダメだ! ごめんッ!!」

興奮の頂点に達した少年は、自由になった身体ではね起きて魔王に抱き付く。

「きゃッ!? ちよ、ちよつとトウジ! 何をしてるの!?!」

早く交わりたい。心の奥底から熱い感情が滲み出して狂いそうだ。

ベッドに押し倒した彼女の顔横に手をつき、両足の間を腰を割り込ませて自由を奪う。

「が、我慢出来なくて……僕はセリシアを……お、襲っちゃいそうなんだ! 今すぐにセリシアと……こ、子づくりしたい!!」



「あッ……と、トウジ様ッ……ソコ、陰唇……」

「うん、シャミールエのエッチな割れ目だね……中……見てもいい？」

背中から優しくお願いと、すぐく迷った様だが小さく頷いて許してくれた。受け入れられた事に感動しつつ、小さい恥裂の端に二本の指を添え、割り開く。

——くちゅう。

「あ……んやッ！」

鏡越しに股を見守る彼女は、ソコが開かれると瞳を閉じそうになるが、触手で搦め捕った両手足を小刻みに震わせつつ、精液を秘宮へ導く雫が滴る小洞を、潤んだ瞳でジッと見詰めていた。

「これは、ドレスの潤滑液じゃないよね？ ……興奮してるの？」

「ッ……そうです。乳首や身体を愛撫されて、性的に興奮しています……で、ですが……私が先程用意した……んッ……精液を活発化させる愛液でもあります」

息を艶っぽく乱して動揺し、白肌に湯とは違う発情汗を浮かばせながら答える。

「そうなんだ……どんな感じで興奮してるのか、教えてくれる？」

「ッ！ ……と、トウジ様に身体を弄られると……胸の鼓動が激しくなります。それと体温が上昇し……はぁ……触られた箇所から、快感が全身に広がります……」

真面目に答えてくれるが、彼女の顔は真っ赤。自分自身の言葉が耳に入るだけでもさらに昂るようで、開いた粘膜の小穴から新しい女蜜が次々と溢れる。

(ちゃんと感じてくれてるんだ……すごく嬉しい)

普段見る事がないシャミールへの恥ずかしがる姿に、幸福感で満たされる。すぐ後ろに立つ少年の物が強張りを増し、彼女の尻下を通り越して、守る物のない剥き出しワレメに反り返りが阻まれた。

「ッ!? んう! ……ああ……トウジ様のペニスが……勃起して……」

竿上部で淫溝を叩き上げた刺激だけで膣口が収縮し、蜜が溢れて宛がった肉棒を熱く濡らされてゆく。

その様を鏡越しに確認するシャミールは、非常にもどかしそうだ。

「……入れるよ?」

淫裂に勃起をこすり付け、いつでもお邪魔出来る様にまんべんなく潤すと彼女は頷く。物欲しそうに蠢く入り口に、充血した切っ先を軽くめり込ませる。

「ほらシャミール、鏡を見て……僕のちんぼ、今から何をしようとしている?」

「と、トウジ様の……ペニス……が、私の膣口を突いて……ん、あ、はあ……はあ」

亀頭で優しくほじり回すだけで、触手で吊るされる手足がビクッ、と痙攣した。

「続けて言つて……説明してくれる通りに、ちんぼ動かすから……」

「ッ! ……は、はい……ペニスが愛液に塗れて……私の中に……あ、あッ……中にい

——ジュブ……ぶぶッ! ヌルルルウ……!!

「あ、ああ……入つてえええ……!!」

処女膜を押し広げると、一段と身体が強張る。やはり痛いのだろうと悟って引き返そうとするが、

「入れてください！ 遠慮せずッ……んう！ こ、このまま中に……入れてくださいッ」

もうこれ以上待つのは嫌だ、と振り返る彼女の涙目がそう物語り、少年も覚悟を決めて後ろから一気に突き上げた。

「ひあ！ あッ!! ……ッ……ッ……ッ……!!」

最奥まで差し込むと、小丘胸を精一杯揺らしながら声にならない喘ぎで、口を開閉させる。粘液と汗だらけの腹筋をヒクつかせて、勃起を受け入れた初穴から、愛液と共に処女の証である鮮血を垂らす。それは竿を伝って、辜丸袋にまで滴り落ちてきた。

(うわッ……シャミーレの中って、ヒダヒダがすごく多いッ!!)

トウジ自身も、予想以上の秘肉の海に群がられて射精しそうになり、全身を力ませる。

入れたばかりの肉幹を、ねっとり包み込む膣粘膜。細かい一ヒダ一ヒダがペニス起伏を次々と撫で回し、少しでも腰を揺らすと妖しく擦られてしまう。

「は、入ってしまいましたあ……トウジ様のッ……勃起ペニスが私の中にッ」

鏡に映る結合部を見るシャミーレは、腹の底から響く震え声で言う。

「ルルト様が言っていた通り……処女膜を破かれても、あまり痛くありません……トウジ様の性交技術は、潜在能力にも負けない天才級ですう」

「そ、そうなのかな？ ……よく分からないけど、精一杯シャミーレを気持ちよくしてあ



げるね……くっ……動くよ？」

寝められるにはまだまだ未熟な射精衝動を精一杯堪えつつ、腰を振る。

「んう！ あ、あッ……私の愛液に塗れたペニスガッ……んう！ はあ、入り口まで戻って……あ、あまた入ってえ……ンはあ！ 出入りするの、鏡に映ってますッ」

貪欲に肉塊を頬張る女裂が、大鏡にしつかりと反映される。太い亀頭が出口に戻つてくると膣穴を拡張し、泡立ち始めた淫液をエラ窪みで掻き出す。それは風呂の床に糸引きながら垂れ落ちて、二人が繋がる真下にいやらしい蜜溜まりを作り上げてゆく。

「シャミーレ、おま○この中すごい音してるよ？ ……はあ……ほら」

一旦引き戻した粘液棒を、細膣に隙間なく徐々に埋め込むと、妖しい音が股から響く。  
——ぐぼッ……ぬッじゅ……るる……ぶ、ぶうるう……

「ああッ！ ほ、ほんと……ですッ……ん、ん……！ はああ。この部屋全体に、私とトウジ様の……はあ……結合音が響いてしまってますッ」

天井や壁、浴槽に反響するのはヌメリ摩擦と、少女の喘ぎ。そして少年が主導権を握っているドレス触手の、潤滑液をまぶしながら吊るし身体を愛撫する子づくり合唱。

「すう……はあ……シャミーレの汗の匂いと、おま○この匂い……それと石鹸の匂いが混ざって、すごくエッチだよ」

先程までとろみ湯に浸かっていただけあって、裸の二人の隔たりとなっているのは布紐と、体液交じりの潤滑液のみ。そんな些細な障害も弾き飛ばすくらい、彼女の背中から触

手と共に膝裏を抱え上げ、激しく突いた。

「ん!? ああ、と、トウジ様ッ……あ、アッ……そんな急に……激しいですッ」

誰かが見れば嫌がつている様にも思うだろうが、鏡に映る横顔と肩越しに振り返ってくる視線は、まだまだ物足りないから激しくシて欲しい、としっかりと伝えてくる。

ならば期待に応えようと、触手を操って彼女の小乳を弄った。

「ひやう!? ああ、む、胸に触手がッ……トウジ様、何をして……」

「シャミーレの可愛い反応、もつと見ようと思つて……はあ……沢山気持ちよくなつて」  
小さい膨らみの片方を、とごろを巻いて軽く締め付ける。

（えつと……触手の形つて変えられるのかな? ……あ、出来た）

カップ状に変化させた触手先端。巻き付いて張った微乳の先端に、優しく吸い付く。器の中にも細かい舌紐を生やして、口でしゃぶる様に舐め回した。

「えッ!? そ、そんな……ひや、あ! け、形状まで変化させるなんて……ん、ンッ! と、トウジ様ッ……どうしてそんな事が……はあ、ああッ! わ、私でも難しいのにッ」

「シャミーレをもつと気持ちよくしようとしたら、出来ちゃった……たっぷり味わつて」  
余った片方の胸は自分の手で愛撫しつつ、相手の肩に顎を乗せ、振り返ってくる少女の唇を奪う。口付けても少し驚いた程度で、すぐに舌を伸ばしこちらの口内を貪ってきた。

「んうッ……ん、ちゅ、チュッ……トウジ様あ……ん、ンッ……チュ」

唾液塗れの粘膜を絡ませ合い、内頬をくすぐつてあげると堪らず吸い付いてくる。腰振

り運動も忘れずにねつとり続けると、シャミールレの身体はどんどん高揚していった。

「んじゅうッ……ぱあ〜ッ、はああ〜、ああ〜……き、キスまでこんなに上手……これだけ私を乱れさせるなんて……先に二人と子づくりして、経験を積まれましたね」

瞳を甘く蕩かせながら唇を拭う少女に言われ、確かにそうだと実感する。

セリシアに簡単な魔法を教わった事で、触手の操作にも応用が利いているのだろう。

それにルルトとのセックスを通じ、身体の動きや体力にも自信が付いた気がする。

「……セリシア様とルルト様が、羨ましいです……」

嫉妬を口にするシャミールレが、とても女の子っぽくて可愛らしく思えた。

「確かに、二人との子づくりで上手くなったとは思うけど……こんなにいやらしい格好でシてるのはシャミールレだけだよ」

鏡に映る愛しい痴態を指差しながら、頬にキスをする。

「ほ、本当ですか？」

「うん……ここに触るのも、シャミールレが初めて」

語り掛けつつ、膝後ろを抱えていた手の片側を離し、代わりに触手を巻き付かせる。そして余った指先で背中を伝い降り、割れた尻谷に忍ばせて窄まった皺を一撫でした。

「んや!? と、トウジ様ッ……そんな、肛門なんて……」

途端にキュンッと臀部が引き締まり、指先を締め付けられてしまう。反応を隠しきれない程、自分でも触った事がないのだろう。

「シャミールも僕のを弄ったでしょ？ そのお返し……二人のココは触ってないしね」  
セリシアとルルトにはまだできていないと知ると、粘液塗れでドレス紐に吊るされた身体をくねらせる彼女は戸惑いつつも、ゆっくり下半身の力を緩める。

皺が広がったのを指先で確認した少年は、いたわるが如くそつと翳った。

「ツ……あ……ん、ンツ……はあく……か、身体が勝手に痙攣してしまいますッ……はあ……触られるのつて、こ、こんな感じなのですね……ひヤッ！ ……気持ちいいです」

逃げたいけど逃げたくない。そんななんとも言えない表情のシャミールは、見えない場所の愛撫摩擦を素直に受け入れている。

刺激に慣れてきた所で、解れ始めた窄まりに潤液塗れの指先を、軽くめり込ませた。

——チュプッ……ヌプ……ヌプ……。

「え!? ひヤッ……んッ！ アッ!? と、トウジ様……だ、出し入れなんてッ……」  
肛内の新しい刺激に慎ましい女体を身震いさせても、指の挿入、排泄はやめない。

（後ろの穴つて、こんなに締まるんだ……入り口がすぐくキツいッ……）

強烈に収縮するアナルに、ヌメる指でもなかなか奥へと進まない。しかし小穴を指の腹で擦りまくと、日常では絶対に聞けないシャミールの変態的な喘ぎ声に勃起力が強まる。

「んああ!? そ、ソコ……腹側の腔壁……今の、すごいッ」

挿入したままの肉竿先端が、知らぬ間に彼女の敏感な場所を直撃したらしい。その場所を探る為、ゆっくり腰をひねって腔の腹側を丁寧にはじってみた。

「あっ！　そ、ソコです……きゃふッ!?　その場所を擦られると……んはああ!?　か、身体が痺れてしまいますッ!」

射精が近付いて膨れた亀頭で、引き締まる膣の快感ポイントを見つけ出す。アナルに挿入する指刺激と相まって、妊娠液が早く欲しいとばかりに女道は潤い、無数のヒダが勃起をしゃぶり続けてくる。

「くッ……だ、ダメだ……もう出そうッ」

感じる姿をもっと観察したかったが、男としてまだまだ成長途中の少年棒は限界だ。

射精までにはほんの少しでも沢山感じさせる為、そして溜めに溜めた精液を子づくり袋に注ぐ為に、我慢震いさせている雄棒で、全力で摩擦愛撫する。

「んああああ!!　トウジ様ッ……そ、ソコばかり……んや、あ、アッ!　ペニス行ったり来たりさせちゃダメですう!!」

膣口までヌメリ戻った亀頭を、勢いよく突き入れる。腹側の快感地点を抉り終えた後、子宮口に強烈な先端キスをお見舞いする。その子づくり運動を何度も何度もお見舞いすると、開きっぱなしの口から垂れる舌と、収縮し続ける陰唇から発情汁が溢れ続けた。

「んああああ!?　む、胸を触手で触っちゃッ……んひゃ!?　肛門も一緒にッ……こ、こんなダメですトウジ様あ!　わ、私……パカになってしまいますう!!」

発射間近で暴れ狂う雄の手と、本能が命じるままに動かす触手。それらで彼女の未発達裸身を弄り回し、廻りまくり、愛し続ける。

「でも嫌じゃないんでしょッ？　はあ、はあ……鏡に映ってるシャミーレ、ふう……ふう……すごく気持ちよさそうだよ……くうッ」

息も絶え絶えに指摘した目の前の鏡は、どこにもない淫乱鏡となっていた。

両手足を粘液触手に縛られて、宙吊りにされた肉付きの薄い少女。その股には繁殖射精に差し掛かった歪曲棒が後ろから突き刺さっていて、強張った少年の腕で可愛らしい胸や尻を弄り回されているのに、とても幸福そうに蕩け緩むシャミーレの顔が映る。

「そ、そうですね！　ん、ンッ！　トウジ様にされるならあ、はあ、はあ……バカになってもいいです！　だらしのない私のおま○こに、子づくり躰をして下さいッ」

身体を多大な快感に濡らした少女は、とうとうそんな事を口から漏らす。こんなにも感じさせているのだと実感した少年は、微笑んで頷いた。

「うん出すよ……はあ、はあ……沢山出すから、僕の精液で妊娠してねッ」

「妊娠しますう！　トウジ様の子供、子宮で育てたいですッ！　……あッ!!　あ、あ……来ますッ……鏡、鏡で見ながら……自分のセックス見ながら、イッてしまえますう!!」

背中を強張らせながら反らし、小さい痙攣が段々と大きくなつてゆく。絶頂が垣間見えた愛しいシャミーレに、頭の天辺まで響く全力の一撃で後押ししてあげた。

「んンウ!!　……ッ……あッ……く、来るッ……イクウ!!」

瞳を快感涙で潤ませる相手の膣ヒダが、今まで以上に剛直を引き搾る。

腰の奥からペニスの根元に集ってきた熱液が、その収縮で一気に動いた。



「と、トウジ兄ちゃん……なんか、すごく積極的ッ」

「……トウジ様を見ているだけなのに……はあ……何故か、す、すごく興奮します……」

「わたしのフェロモンみたいにい……ンッ！ 女の子を誘惑する能力でも使ったのお？」

「も、もう！ 何が皆でよ、スケベなトウジ！ ……しよ、しようがないんだから！」

魔法や能力を特に使った訳でもないが、子づくりしようと誘った皆は嬉しそうに抱き付いてきて、一緒に向かいの部屋の巨大ベッドに移動した。

「でも、僕が初代魔王のリアさん選ばれた事ぐらいは、教えてくれてもよかったのに」

「……え？」

ベッドに乗り上がりながら冗談げに話すと、途端に四人の少女達は固まってしまった。

「選ばれたって……アタシ、お父様からそんな話は聞いてないわよ？」

知っていてもよさそうなセリシアも、身に覚えがないと話す。

「あれ？ ……で、でもさつき旧魔王さんが、一人前の魔王に言い伝えて……あッ!？」

話しながら、どうして知らないのかを理解した。セリシアに王座を継承してはいるが、まだまだ半人前な娘だとして、一人前になるまで黙っていた事になる。

「……へえ……つまりアタシは、まだまだ半人前だったって事ね……」

「ルルト達も、旧魔王様に信頼されると思ってたのに……でも、トウジ兄ちゃんには話しちゃったんだ？ まだ会って二日目なのに」

ベッドに乗り上がってくるセリシアとルルトの目付きが、野生的で危険な物になる。



「い、いやほら……僕はその、選ばれてたし……皆にはタイミングがなかったんじや」

「有り得ません……重大な秘密であればこそ、信頼出来る部下には話すべきです……」

「そうよねえ。旧魔王様はわたしとよくお喋りしてたのに、先にトウジくんねえ」

逃げようとしても、シャミーレとキュネスに背中を支えられてしつかり拘束される。

恨みの矛先がズレている様にも思えるが、興奮した少女達相手ではどうしようもない。

(け、結局はさつきと、あんまり変わらない気がするぞ……)

半ば強引に押し倒された少年は、積極的な将来妻に身を任せる。

「あれだけ走り回ってたからあ、子づくりの前に水分補給が必要よねえ」

寄り添って横になるキュネスは、こちらの頭を抱えて巨乳へと抱き寄せた。乳首を唯一隠している細い布衣装をずらし、先端をあらわにすると授乳を促してくる。乳首を唯一

「で、でもさつき沢山飲んだ……んむッ!？」

口答えしたが最後、柔らかい大膨らみに咲いた、小指の先ぐらいの尖りを含む。甘ったるくて温かいミルクがたちまち口内に溢れ始めた。

「あッ……ダメよトウジくん、ちゃんと飲まない……ほら、わたしの乳首ペロペロつてするだけでも、もつとミルク出るからあ」

口を逸らそうとしても、しつかり抱えられた頭は動かない。言われるまま口の中で先端を舐めはじめれば、確かに内頬をキュネスの射乳が優しく叩いてきた。

「……あん!? そうそう……上手よお……はあ……沢山飲んでね、トウジくん」

母性的でありながら、官能的でもある声と微笑に満ちる世話焼き少女。

垂れた瞳に見詰められると赤子に戻った気持ちになり、胸を少しずつつ吸い上げた。

「ちょ、ちよつとキュネス！ 一人で勝手に始めないでよッ。それにトウジ！ アンタそんなにおっぱいが好きなら……い、言ってくれば……アタシがあげるのに」

怒るセリシアは、自らドレスの胸元に手を掛けて、今にでも美乳をさらけ出しそうだ。

他の妻達に焦りを感じている様な姿が、とても魔王とは思えず新鮮に見える。

「……なるほど、トウジ様はやはり、本格的な授乳も好みなのですね……」

だが、脱ごうとする魔王よりも先にシャミールが動いた。キュネスとは反対側で添い寝をしてくると、すぐさま服の胸布をはだけて豊乳をあらわにする。それだけでなく特技の肉付き変化でより大きくし、もっちりとした柔らかい重乳を顔に押し付けてきた。

「本物の母乳ではありませんが……は、あッ……精液の濃度を高める淫料が、出る様になりました……さあキュネス様、トウジ様をこちらに……」

なんとなく嫉妬を滲ませる少女は、キュネスから少年の頭を奪って乳白色の淫液を溢れさせる胸豆を、少年に啜えさせる。

（あ、ホントだ……キュネスのとはちよつと違うけど、美味しい）

母乳に似た優しい甘さが舌に広がり、噴き出る勢いが中々に強くてどんどん飲み吸る。

「んッ!? ひゃ、あ……と、トウジ様……はあうッ……まだまだたっぷり出ますから……はあ……あまり私の胸を、苛めないでください……」

本格的な授乳快感に背筋を震わせるシャミーレ。伏せがちな瞳を思わず蕩かせる程だから、もっとして欲しいのだと悟って、硬く勃起させる先端を舐め回してあげる。

「シャミーレちゃんのおっぱいばかりダメえ……わたしのも飲んでえ」

だが、ムツとしたキュネスが奪い返そうと、強引に引き剥がす。シャミーレの乳輪ごと啜っていた少年の唇が乳から離れた途端、粘着質な吸着音が部屋に響き、先程まで味わっていた乳首に唾液糸が引く。

そんな事もお構いなしに、世話焼き少女はミルクが出る巨乳を吸うように導く。

「ちよ、ちよつとキュネふ……シャミーレ……お、落ち着いてッ……んうッ」

二つの魅惑的な膨らみが、左右から何度も迫ってきて視界を塞がれる。目の前で男を欲情させるいやらしい胸が躍り、性欲を高める乳を飲ませ続けられた。先程使った精力剤の影響もあって、股間はあつと言う間に膨張する。

「あ！ おっぱい飲んでるトウジ兄ちゃんのおちんちん、大きくなってる！」

硬くしなつた竿が下着の中にある事に、いち早く気付いたルルト。瞬く間に下半身に飛び掛かってくると、問答無用で邪魔なパンツをずり下ろす。

「んやッ……えへへ、ピョンつて出てきた。ココはいつも、元気一杯だね」

窮屈な空間から勢いよく飛び出した肉棒に、危うく顔を叩かれそうだった獣少女は、怒る事もせずに膨れた一物を繁殖欲塗れな瞳で見詰めてくる。

「それじゃ、ルルトはトウジ兄ちゃんミルクを飲ませてもらおつと……はあくむッ」

ペットが愛しい主人にする様な頬ずりをしたかと思えば、唇をしつかりと濡らしてから股間棒に容赦なく被り付いてきた。

「ううッ!? あッ……る、ルルト……いきなり激しいよッ」

与えられる乳房に夢中だった少年は、下半身を襲った急激な快感に驚いて、視線を下げて股間を確認した。すると、唇の脇から舌をチラつかせ、好物のおやつを堪能しているみたいな獣少女が目に入る。

「えへへ……ん、ちゅ、ジユるッ……はあむッ、ちゅ、チュウ……ッ! トウジ兄ひゃんのちんぽ、すぐくかふあいッ……ん、ンッ……ぱあッ! とつても興奮してるんだね」  
四つん這いで根元から先端まで粘膜を這わせ、唾液塗れにしたルルト。耳と尻尾をひつきりなしに動かして、彼女も欲望塗れになっているらしい。

「も、もう! 少しはアタシの言う事も聞きなさいよ! か、代わりなさいルルト!」

今まで皆を指揮しようとして必死だったセリシアも、とうとう我慢の限界を迎える。ペニスを再び啜えようとした獣耳少女の隣に並んで屈むと、勃起の根を掴んで己の顔に向けた。

「あ、アタシだって……と、トウジのおちんちん、気持ちよく出来るんだからッ」

生唾を飲み込む口を窄めた魔王は、亀頭の先にそつとキスしてくる。しかしそれだけに留まる事はなく、キュッと引き締まった口の中に、一物がゆつくりと飲み込まれた。

——チュウッ……チュププ……ッ。

「うあッ!? セリシアの口に、入、るうううッ」

気が強い少女がしてくれるとは思えない口奉仕に、驚く間もなく快感に悶える。

口の中はまるで腔。唾液でたっぷりと潤んだ内頬に、竿の起伏がヌメリ擦られて足が震える。引き締まる唇に締め付けられれば、頬内に密閉された勃起が激しくビクつく。

「んッ!? ……んうう……ん、ンッ、ンッ!!」

喉の奥を小突いてもセリシアは少し驚くだけで、すぐに首を前後させ始める。纏わり付く口膜が、唾液塗れの先端から根元までを何度も何度も往復し、極上摩擦を与えられた。

「せ、セリシアちゃん……ルルトよりも、お口の使い方上手い!」

「ん、んう! チュウつばあうう! はあ、はあ……と、当然よ! トウジの妻なんだから……これぐらいは出来ないかね!」

一旦肉剣を放した魔王は、唾が糸引く唇を舌で拭いつつ、得意気に言い放った。

「……エッチな本で勉強されたのですよね?」

だがシャミーレの鋭い問いが飛ぶと、ギクリと戸惑う顔を隠す様に、再びしゃぶる。  
「くうッ!? せ、セリシアッ……ッ……そんなにしたら……で、出ちゃうッ」

蠢く舌が肉木の敏感な裏側をこそぎ、少年がセリシアの勉強を悟る前に、蕩ける刺激で想像を拭い落とされてしまう。あまりの激しさに射精欲が滲み、息が荒くなってきた。

「出しちゃダメだよトウジ兄ちゃん! あッ、玉々もピクピクしてる……チュウッ」

我慢しろと言いながらも、ルルトは引き締まる鞆丸袋を舌で舐めまくり、射精を促しているとしか思えない責めを連発してくる。



「え!? くッ、そんなに玉ッ……舐めないでッ……ど、どうして出しちゃダメなの!？」

「だってえ、この後わたし達に……たつぷりと……子づくり射精してもらおうからあ」

フェロモンで色つぼさが増した声のキュネスが、授乳を再開しながら口にする。

「そうですよ……はあ……これはあくまで、精液を溜める為の前戯ですから……はあ……勝手に出しては、皆が許しませんよ?」

シャミーレもどんどん昂り、胸を口に押し付けて精液増量乳を飲ませてくる。さらにこちらの乳首を指で弄り回し、ちよっぴりいじわるな快感を与えられてしまう。

(うおお! こ、コレはッ……皆に襲われてッ……す、すごい光景!)

シャミーレとキュネスの巨乳に顔を挟まれつつ、セリシアとルルトに勃起を嬲られる。

少女達に群がられる光景と刺激に、身も心も溶かされそうだ。いくらセックスの経験を積んだとは言えまだまだ初心な少年に、この状況で射精を我慢しろなんて拷問に近い。

「はあい。ミルクたつぷり飲んだわねえ。それじゃ今度は、精子ちゃん達を全部起こすおっぱいマッサージをしようかしらあ」

「そういう事でしたら……私も一緒にします……」

キュネスが胸奉仕の為に動けば、シャミーレも負けじと続いて股間を目指す。

「それじゃセリシアちゃん! 今度はお兄ちゃんの乳首をペロペロしようよ!」

「え!? と、トウジの乳首を!? ……わ……分かったわ、乳首ね、乳首……」

代わりに今度はセリシアとルルトが胸板に寄り掛かってくる。いたずら気味な笑みを浮

かべる獣耳少女に対し、魔王は戸惑いながらも、懸命に乳首を舐め回して来た。

「あぁッ!? うわ……な、舐められるのって……こんなに気持ちいいんだ!!」

射精間際に敏感になる身体。どこを触られても感じてしまうのに、比較的鋭利な感覚を有する胸を舐めしゃぶられると、男とはいえ悶えてしまう。

「ほらほら、精子ちゃんたち起きて……ん、ンッ……おっぱい体操の時間ですよ〜」

「はぁ、はぁ……亀頭に精液が滲んでます……竿もかなり膨らみましたね……」

一番敏感なペニスには、天然少女と観察娘の巨乳がぶつかってくる。二つの大きな谷間に挟まれた肉塔は、柔軟に形を変える乳山責めに耐えられず、屋上から蕩け出した欲望液を空へと今にも放ちそうさだ。

それでも彼女達の責めがやむ事はなく、敏感なポイントを的確に責めてくる。

(ぐうう!! あぁッ! で、出そう……精液が……引きずり、出されそうッ!!)

竿中に充満する熱粘液。腰の奥にまで行列が出来て早く外に出したいのは山々だが、彼女達を妊娠させる為に我慢する。胸が男根に擦れまくり、乳首に吸い付かれる吸着音。少年の我慢声に混じり、少女達の妖しい息遣いやくぐもり声が部屋に満ちてゆく。

「んッ……チュはあく〜。そ、そろそろ準備は……いいんじゃないのアンタ達?」

「ん〜……ちゅ、チュ……そうだね。トウジ兄ちゃんも、もう限界みたいだよ?」

「はぁぁ……名残惜しいですが……ンッ! これだけ溜めれば、十分でしょう……」

「うわぁ〜、おちんちんが最初よりもすごい事になってる。トウジくん頑張ったわねえ」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 盗作行為は厳禁です。また、本誌の発行部数は、毎月10万部を突破しています。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!